



公開シンポジウム
『中世熊野の港湾遺跡 新宮津を考える』
発表資料集



公開シンポジウム

『中世熊野の港湾遺跡 新宮津を考える』

日時:平成30(2018)年1月7日(日)

「新宮城下町遺跡をとりまく環境」

「新宮城下町遺跡の発掘調査成果」

「中世熊野川河口の物流環境」

「新宮城下町遺跡にみる中世都市の諸相」

公益財団法人 和歌山県文化財センター

〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1

(TEL) 073-472-3710

(FAX) 073-474-2270

(URL) <http://www.wabunse.or.jp>

公益財団法人
和歌山県文化財センター

公開シンポジウム

『中世熊野の港湾遺跡 新宮津を考える』

発表資料集

平成30(2018)年1月7日(日)

公益財団法人 和歌山県文化財センター

開催にあたって

新宮市教育委員会・(公財)和歌山県文化財センターでは、新宮市文化複合施設建設に伴い平成27年度から新宮城下町遺跡の発掘調査を実施しています。新宮城下町遺跡は熊野川沿いに立地し、国指定史跡の新宮城跡の西側に展開しています。これまでの調査では、時期の異なる3つの遺構面を確認しています。第1遺構面では江戸時代の上級家臣の屋敷地や道路などが、第2遺構面では中世(平安時代末頃から室町時代)の掘立柱建物群や倉庫群・工房跡・道路・石垣などが、第3遺構面では縄文時代の土坑などが発見され、各時代の遺物も多く出土しました。

このうち第2遺構面で検出した遺構の内容や当遺跡の立地から、中世の遺構は川湊に関連するものであると想定でき、これらは鎌倉時代の文献史料に登場する「新宮津」の一部であった可能性もあります。調査で出土した遺物には東海地方や瀬戸内地方の土器類の他に多くの輸入陶磁器があり、東西日本の海上交通の中継地かつ物流拠点であったことを示唆しています。また、調査地点は、熊野速玉大社と阿須賀王子社を結ぶ熊野参詣道沿いの陸路の要衝に位置しています。以上のことから新宮城下町遺跡は中世熊野の歴史を紐解く上でも大変重要な遺跡であると考えられます。

今回のシンポジウムでは、新宮城下町遺跡の発掘調査成果を報告するとともに、遺跡の性格や重要性を文献史学及び考古学の視点から迫っていきます。

平成30年1月7日

公益財団法人 和歌山県文化財センター
理事長 櫻井敏雄

〈公開シンポジウム〉

「中世熊野の港湾遺跡 新宮津を考える」

【開催日程】

12：50 開会挨拶 南 正人：(公財)和歌山県文化財センター

発 表

13：00～13：15 基調報告「新宮城下町遺跡をとりまく環境」
小林 高太：新宮市教育委員会

13：15～13：45 基調報告「新宮城下町遺跡の発掘調査成果」
川崎 雅史：(公財)和歌山県文化財センター

13：45～14：15 基調報告「中世熊野川河口の物流環境」
山本 殖生：熊野三山協議会

14：15～14：25 休憩

14：25～15：35 講演「新宮城下町遺跡にみる中世都市の諸相」
鋤柄 俊夫：同志社大学文化情報学部教授

15：35～15：45 休憩・討論準備

討 論

15：45～16：30 各発表者
コーディネーター 村田 弘：(公財)和歌山県文化財センター

16：30 閉会

開催日時：平成30年1月7日(日)12：50～16：30

会 場：新宮商工会議所 大ホール 新宮市井の沢3番8号

主 催：公益財団法人和歌山県文化財センター

後 援：和歌山県教育委員会、新宮市教育委員会

【目 次】

*開催にあたって

*開催日程

*発 表

基調報告「新宮城下町遺跡をとりまく環境」……………	5
小林 高太：新宮市教育委員会	
基調報告「新宮城下町遺跡の発掘調査成果」……………	9
川崎 雅史：(公財)和歌山県文化財センター	
基調報告「中世熊野川河口の物流環境」……………	17
山本 殖生：熊野三山協議会	
講 演「新宮城下町遺跡にみる中世都市の諸相」……………	25
鋤柄 俊夫：同志社大学文化情報学部教授	

- 1 本書は、公開シンポジウム「中世熊野の港湾遺跡 新宮津を考える」の発表資料集である。
- 2 本シンポジウムを開催するにあたり、ご協力をいただきました多くの機関、関係者の皆様に深く感謝の意を表す。
- 3 本書の編集は、川崎雅史（公益財団法人和歌山県文化財センター）が担当した。
- 4 このシンポジウムは、文化庁平成29年度和歌山県内地域の特色ある埋蔵文化財活用事業の補助金を受けて実施している。

新宮城下町遺跡をとりまく環境

小林高太 新宮市教育委員会

1. はじめに—発掘調査の経緯—

新宮市では文化複合施設の建設計画を進めている。建設予定地は、旧丹鶴小学校及び旧丹鶴幼稚園、旧新宮市民会館の敷地内である。

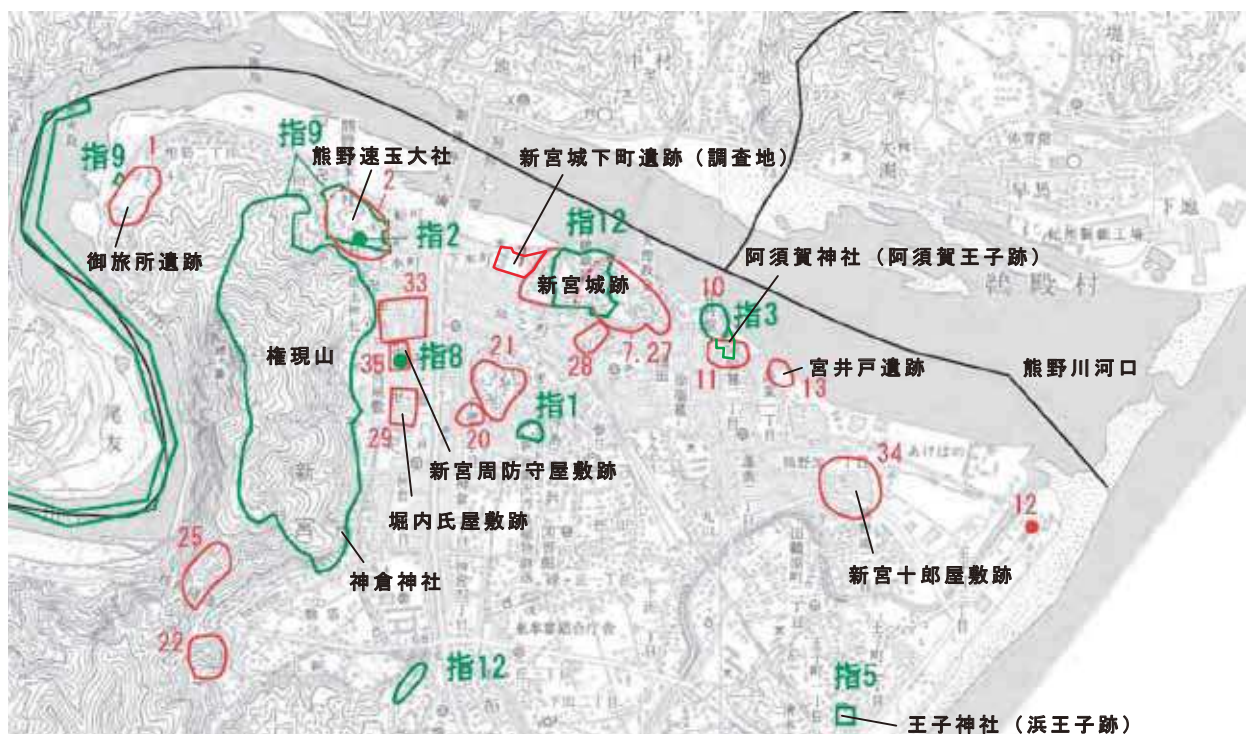
計画地は新宮城大手に面する場所であり、江戸時代に描かれた絵図では、「侍屋敷」と記されている。平成26年度に丹鶴小学校敷地内において行われた工事に際し、中近世期の土器や陶磁器等の遺物が出土した。このことから、江戸時代の城下町遺跡が破壊を受けずに残存する可能性が高くなり、また、それ以前の時代の遺跡の存在も窺わせた。

これらのことから計画地内の遺跡の存在を確認することを目的として、平成27年度に試掘調査を実施した結果、江戸時代の城下町に伴う石垣や中世期の土坑等の遺構が確認されたことから、計画地周辺が埋蔵文化財包蔵地「新宮城下町遺跡」として新規認定された。その後、第1次発掘調査をはじめとして、複数回にわたり発掘調査（本調査、確認調査）を実施しており、縄文時代から江戸時代にかけての複数の年代の遺跡が確認されている。

ここでは、新宮城下町遺跡周辺の地理的、歴史的環境について見ていきたい。

2. 地理的環境

新宮城下町遺跡は、熊野川の河口部右岸に位置する。熊野川は大峯山系に源を発し、奈良県、三重県、和歌山県の三県をめぐって太平洋（熊野灘）に流れ出る。河口付近に大きな沖積平野を形成せず、山間部を抜けてすぐに海に注ぐ。河口付近のわずかな平地に新宮市街地



第1図 新宮城下町遺跡周辺の遺跡分布図

が形成されている。遺跡は熊野川が形成した自然堤防上に立地しており、付近の標高は約9mを測る。河口から約1.2km 遡った位置にあたる。

遺跡のすぐ東側には、江戸時代に新宮城が築かれた丹鶴山があり、かつては丹鶴山の南には日和山、臥龍山という低丘陵が横たわり、市街地を東西に分けていた。市街地西方には千穂ヶ峰を主峰とする権現山がそびえており、その北東裾に熊野速玉大社、南東端に神倉神社が鎮座している。

また、熊野川河口から南西方向へ王子ヶ浜にわたって浜堤が発達し、現在の市街地の大部分は沼沢地であったものとみられ、市街地中心の浮島の森はその名残といえる。

3. 歴史的環境

新宮城下町遺跡の発掘調査では、大別すると3つの遺構面が確認されている。第1遺構面は江戸時代、第2遺構面は古墳時代と鎌倉時代～室町時代、第3遺構面は縄文時代中期である。

これまでに新宮市内で行われた発掘調査はわずかであり、詳細が明らかになっている遺跡は少ないが、以下では、各時代ごとに周辺の遺跡等を紹介し、歴史的環境を見ていく。

(1) 原始（縄文時代、弥生時代、古墳時代）

縄文時代から古墳時代にかけての遺跡の多くは、熊野川右岸に沿う微高地（自然堤防）上に立地している。

縄文時代の遺跡としては速玉大社境内遺跡から昭和33年の神宝館の建設工事に際して、縄文時代中期の土器が出土している。以後境内各所で行われた工事、植林に際して、縄文時代中期から晩期にいたる時期の土器や打製石斧、石鏃等が出土している。中期後半の土器のなかには、東日本に分布の中心をもつものが含まれている。また、権現山北西端に位置する速玉大社御旅所遺跡において、昭和35年に縄文土器の小片が採取されている。速玉大社の両遺跡では、いずれも縄文土器や石器等の遺物が確認されたのみで、遺構は確認されていない。

弥生時代・古墳時代の遺跡としては、阿須賀神社遺跡が挙げられる。昭和28年以降、5次にわたり発掘調査が行われ、竪穴建物や掘立柱建物、弥生時代後期から古墳時代にかけての土器や石器が確認されている。祭祀に関係する遺物（ミニチュア土器、滑石製白玉等）が出土しており、蓬萊山信仰の起源を窺うことができる。また、宮井戸や日和山周辺でも弥生土器が採集されている。

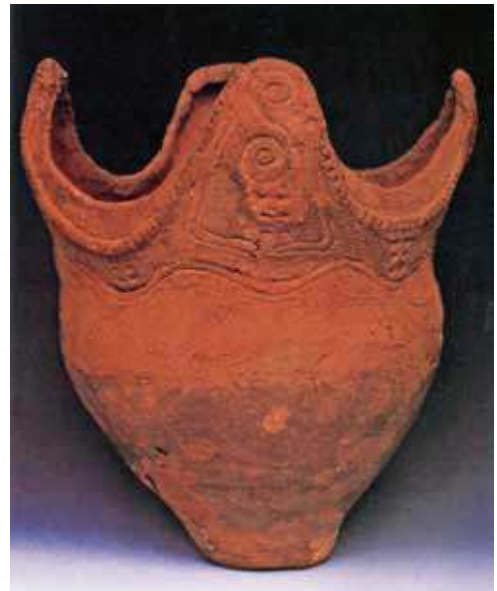
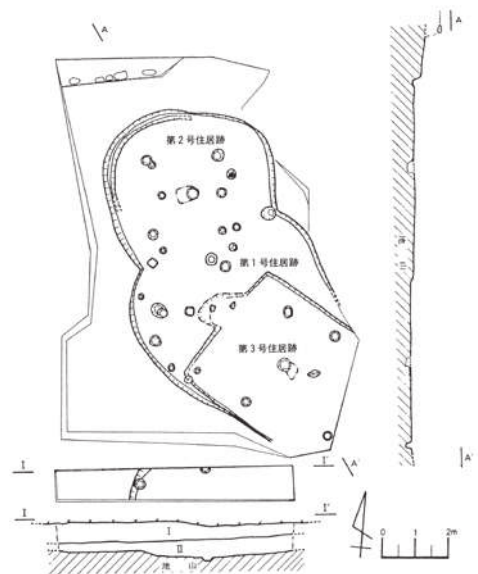


写真1 速玉大社境内遺跡出土縄文土器



第2図 阿須賀神社遺跡竪穴建物平面図



写真2 神倉山銅鐸



写真3 阿須賀神社御正体

昭和31年には、神倉神社境内のゴトビキ岩の陰から銅鐸（近畿式6区袈裟襷文）の破片が出土している。製作時期は、弥生時代後期と推定される。

(2) 中世（鎌倉時代～室町時代）

平安時代後期から鎌倉時代にかけて、熊野三山への参詣（熊野詣）は上皇・貴族により隆盛を極める。それに伴い、市内には熊野信仰に関係する遺跡が数多く残されている。

権現山では多くの経塚が確認されている。如法堂経塚からは、平安末期の陶製外容器のほか、金銅製経筒、室町時代の礫石経などが出土している。庵主池経塚からは平安時代末期から鎌倉時代にかけての金銅製懸仏、南北朝期の銅製納札、室町時代の土製地藏菩薩像などが出土している。

阿須賀神社背後の蓬莱山には200点以上にのぼる平安時代末期から室町時代にかけての御正体が発見されている。本尊は、熊野十二所権現の本地仏が表現されており、その半数近くは阿須賀神社の本地仏大威徳明王である。このような遺跡からも、熊野に対する篤い信仰の様子が窺える。

新宮城下町遺跡のある丹鶴山一帯は、熊野三山の一つである熊野速玉大社から阿須賀神社（阿須賀王子跡）への参詣道沿いに位置し、古くからの要衝の地にあたる。近世の編纂書である「熊野年代記」によれば、付近には、平安時代頃には熊野別当が別邸を築き、平安時代末頃には別当屋敷が移されたともある。その頃に、丹鶴山（丹鶴城）の名称の由来にもなっている「丹鶴姫（鳥居禅尼）」が東仙寺を建てたとの記録も残り、同じ頃に丹鶴山南麓には香林寺（宗応寺）があったとされている。また、丹鶴山周辺からは、工事に伴い、瀬戸や常滑といった東海地方の陶器類が多数出土しており、中世墓地に伴う遺物と考えられている。場所を移した現在の東仙寺や香林寺に伝わる五輪塔や宝篋印塔などの供養塔も、これらの墓地に係るものと思われる。

鎌倉時代を過ぎると、熊野別当の勢力が衰退するが、熊野三山の上位の役僧である宮崎氏が東仙寺を修理し、新宮城の二ノ丸である現在の正明保育園付近を居館としたとある。戦国

時代になると堀内氏が台頭し、戦国時代末には丹鶴山に城を築き、麓に城下町形成を行ったとの説も伝わる。

また、市街地には新宮十郎行家屋敷跡（熊野地付近）や新宮周防守屋敷跡（本廣寺付近）、堀内氏屋敷跡（全龍寺付近）等といった中世期に新宮を中心に活躍した有力者達の屋敷跡の推定地が遺跡とされており、中世期の新宮の町並みを考える手掛かりとなっている。

（3）近世（江戸時代）

江戸時代には、新宮城が築かれ、周辺が城下町として整備された。江戸時代に描かれた絵図が残されており、当時の新宮城や城下町の様子を知ることができ、城下町は、江戸時代の初期には、幕末に近い町割りとなっていたことを窺うことができる。

新宮城については、関ヶ原の戦いの後、紀州藩主となった浅野幸長の重臣である浅野忠吉が慶長6年（1601）に新宮城の築城を開始した。元和元年（1615）に一国一城令により廃城となるが、元和4年（1618）に再び築城が認められる。しかし、元和5年（1619）に幸長が広島に転封になるのに伴い、忠吉は備後三原城へ移る。紀州藩主には徳川頼宣がなり、新宮城には付家老である水野重仲が入り築城を続け、寛永10年（1633）頃に完成したとされる。

丹鶴山上部に天守台、本丸、出丸、鐘ノ丸、松ノ丸を配置しており、天守台からは太平洋を一望できる。城下町遺跡に面した西側山麓には、二ノ丸（上屋敷）と大手門が、熊野川沿いの北側山麓に水ノ手郭が築かれている。水ノ手郭においては、発掘調査により炭納屋跡（礎石建物）が19棟確認されている。



写真4 新宮城跡水ノ手郭炭納屋跡

城東側の池田には材木問屋、炭問屋が置かれ、熊野川流域から木材、木炭が集積された。これらは、廻船業者により江戸や大坂に運ばれ、売買されていた。また、全国から米や塩、衣類といった日用品等も廻船により新宮へ運ばれ、さらに熊野川上流・中流に舟運で送られていたと推測される。丹鶴山周辺を中心とした熊野川河口部は、熊野川舟運と海上輸送の中継地点、流通拠点であり、新宮城下町の経済活動のみならず、山間部の人々の生活も支えていた。



写真5 熊野川河口の風景（近代、中瀬古友夫氏提供）

〔主な参考文献〕

上野元 1987 『熊野速玉大社の縄文遺跡と遺物』 速玉文庫第7巻 熊野速玉大社

新宮市 1983 『新宮市史』 史料編上巻

新宮市教育委員会 2001 『新宮城跡の歴史と発掘調査』

新宮城下町遺跡の発掘調査成果

川崎雅史（公財）和歌山県文化財センター

1. はじめに

新宮市は、国指定史跡新宮城跡の西側において文化複合施設の建設計画を推し進めている。建設予定地は、旧丹鶴小学校・幼稚園の敷地内で、新宮城跡の範囲からは少し外れるものの、近世に描かれた絵図から武家屋敷であったことが分かっていた箇所であるため、平成27年に開発に先立って試掘調査が実施された。その結果、中・近世の遺構の存在が確認され、周知の埋蔵文化財包蔵地「新宮城下町遺跡」して新規認定された。ただ、本来の新宮城下町は、江戸時代の絵図などから窺うと武家屋敷やその外を囲む町屋などを含め広範囲に及ぶが、新宮城跡に接する旧丹鶴小学校・幼稚園付近のみが新宮城下町遺跡となっている。

新宮城下町遺跡は、新宮城跡が位置する丹鶴山西麓から千穂が峯北麓の熊野速玉大社付近にかけて熊野川によって形成された自然堤防上の標高約9m付近に位置する。周辺は熊野川河口部にあっては、比較的安定した微高地となっている。

新宮城下町遺跡の発掘調査は、小規模な確認調査も含め継続的に行われているが、ここに紹介するのは、平成28年に実施した第1次発掘調査・確認調査（1）、平成29年に実施した確認調査（2）の成果である。また、今回のシンポジウムの内容は中世を対象とするものであるが、新宮城下町遺跡の性格を示すために、各時代の遺構の概略も説明する。



第1図 調査地位置図

2. 調査の成果

調査区付近の旧地形は、旧丹鶴小学校校庭付近が最も高く、北側は熊野川に向かって下っている。第1次発掘調査と確認調査(2)の①～⑧区は校庭付近に設定した調査区で、後世の削平・攪乱はあるものの、ほぼ全域に3つの遺構面が確認できる。第1遺構面は江戸時代、第2遺構面は古墳時代と平安時代末頃から室町時代、第3遺構面は縄文時代中期となる。一方、旧丹鶴幼稚園付近に設定した確認調査(1)の調査区から北側では、現地盤より4m以下でも地山面まで到達しない状況である。繰り返し整地・造成が行われていることもあって、江戸時代の第1遺構面以下に室町時代の遺構面が3面以上存在するが、狭い範囲での調査で、それ以下の状況は明らかになっていない。



第2図 調査区配置図

(1) 江戸時代の遺構

江戸時代の遺構面は基本的に1面のみで、江戸時代を通して城下町形成時とほぼ同じ面を踏襲しており、和歌山城下町などのように嵩上げを伴う目立った整地は行われていない。検出した主要な遺構は道路遺構と武家の屋敷地である。屋敷地は、城下町のなかでも新宮城大手門近くを占地することからも上級家臣のものと判断できる。

道路遺構は2本確認している。これらは、熊野速玉大社から阿須賀王子社を繋ぐ城下町の基本軸となる東西方向の道路から折れて熊野川方向に伸びる南北方向の道路である。東側が「河原町通」、西側が「竹矢町通」と呼ばれていたことが江戸時代に描かれた絵図などから窺うことができる。調査区付近では道路面は掘割状に屋敷地より約0.6m低く構築されている。路面は川方向に緩やかに下っており、城下町の排水も兼ねていると言える。構築当初は、河原町通が幅5.2mで、西側に幅・深さ約0.3mの石組みの側溝を設けている。その後、徐々に道路の嵩上げを行って幕末以降には道路の東側にも石組みの側溝を設けている。竹矢町通は幅3.0mで、構築当初には側溝はなく、その後徐々に嵩上げを行い東側に石組みの側溝を設けている。構築当初の道路面は、どちらも細かい円礫を敷き固めていた。

屋敷地は、川寄りとなる北側の敷地が一段(段差1.0～1.3m)低く造成されている。各屋



写真1 新宮城跡と新宮城下町遺跡



写真2 江戸時代の遺構・河原町通(北から)



写真3 竹矢町通（北から）



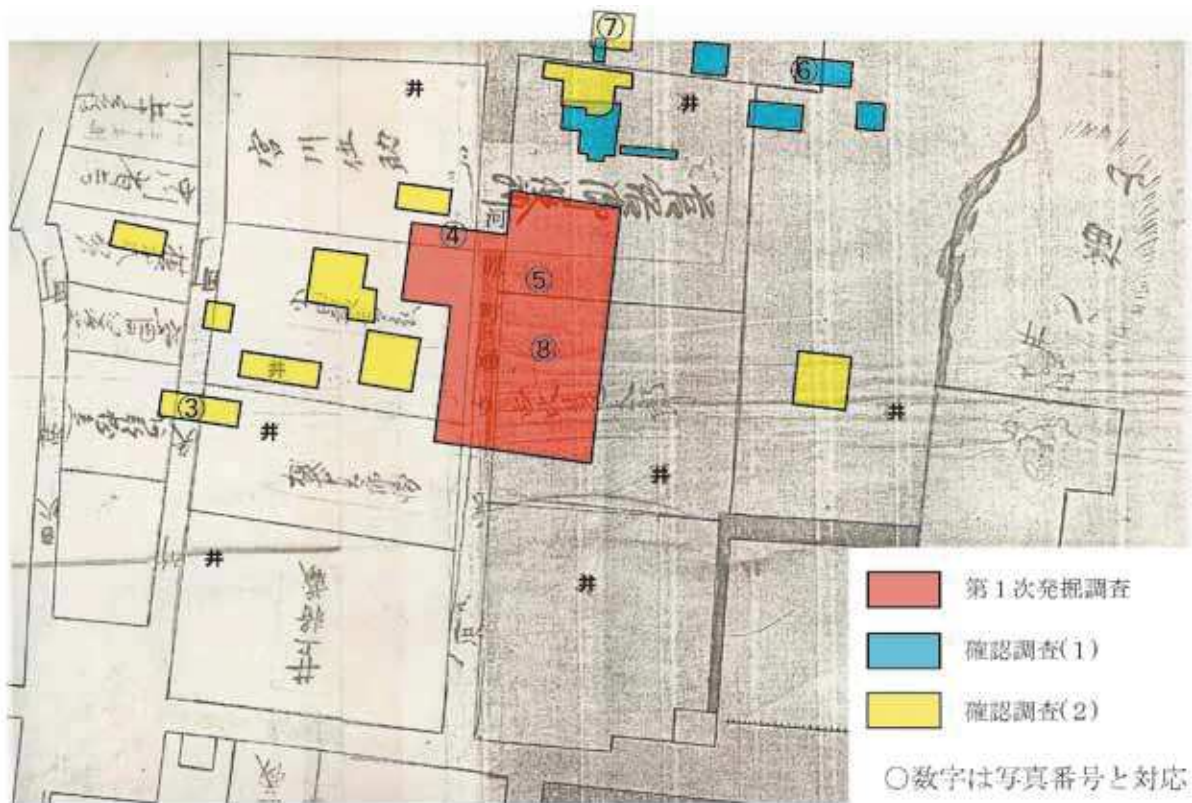
写真4 武家屋敷の石垣（北西から）



写真5 武家屋敷の石垣と土堀基礎（北西から）



写真6 城下町(武家屋敷)の内外を区画する石垣(西から)



第3図 幕末の絵図に書き入れた調査区（新宮市立図書館蔵の絵図に加筆）



写真7 基壇状遺構（北から）



写真8 石組土坑・埋甕（東から）

敷地は熊野川流域で産する花崗斑岩で築かれた石垣で区画される。石垣の積み方は各所で異なり、江戸時代初期（浅野期）の特徴をもつ箇所や、新しい様相をもつ箇所がある。ただ、他に屋敷地区画を示す石垣などが確認されないことから、石垣の位置は城下町形成時のままで、改修を行いつつも幕末まで石垣は原位置に遺存していたと判断できる。

既往の調査区を幕末の絵図に書き入れたのが第3図である。この絵図は、かなり忠実に描かれているが、絵図の内容から判断すれば河原町通と竹矢町通を確認し、主に小田部家、由比家、営繕御役所の敷地を調査したことになる。屋敷地の規模では、小田部家が東西44m、南北35mあり、営繕御役所は南北約37mであることが明らかになっており、河原町通に面する屋敷地は、おおよそ1,000㎡を越す面積を有していると想定できる。

屋敷地内の遺構としては、屋敷地入口の石段のほか石組土坑・埋甕・埋桶・集石遺構・礎石列、塵芥処理穴などがある。このうち礎石列は、屋敷境で検出していることから土堀に伴うものであると考えられる。ただ、主屋などの礎石は残っておらず、屋敷地内の建物配置は明らかになっていない。また、特徴的な遺構としては、炭・焼土を伴う土坑付近から割れた鏡を含め銅製品が集中して出土しており、屋敷内で銅製品を鋳直して別の製品を鋳造していた可能性がある。このほか、城下町の北側を区画する石垣の外側では、方形に石組みした基壇状遺構（約3.0m四方）が検出されている。湊に関連する常夜燈あるいは燈籠台の可能性もある。

（2）中世の遺構

中世の遺構としては、掘立柱建物4棟以上、地下式倉庫11基、大形土坑30基以上、溝状遺構、石段・道路遺構、鍛冶遺構などを検出している。多くの遺構が重複して存在し、平安時代末頃から室町時代にかけて連綿と土地利用されていたことが窺える。

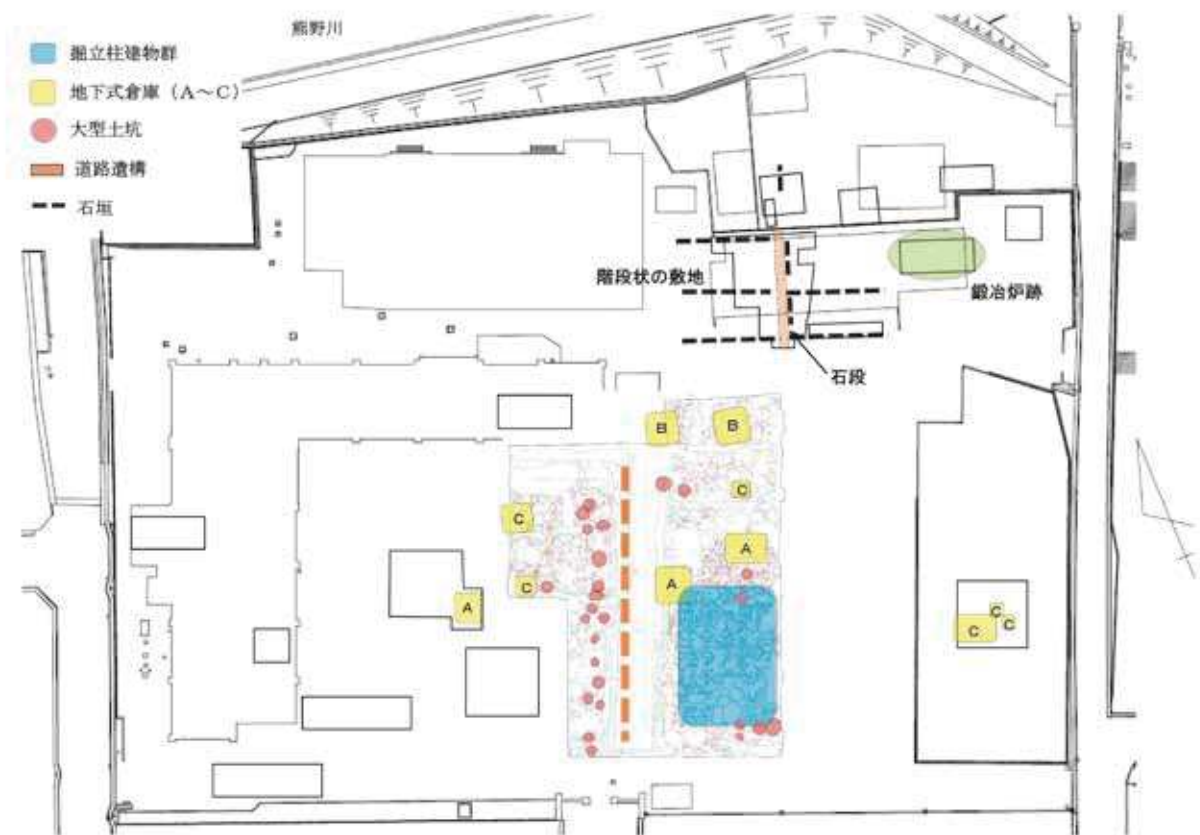
掘立柱建物は、第1次発掘調査の調査区東側中央から南にかけて集中している。この箇所は柱穴の密集度が高く、中世の建物が、ほぼ同じ位置で建て替えられていることが窺える。確認している掘立柱建物は基本的に棟方向が南北で、柱間が2.1mで桁行6間×梁行4間の規模で、平面積が約100㎡と当時としては大きな建物と言える。柱穴の直径は30～50cmで、多くは底に据石を置く。据石は20～30cmの大きさで、石材は古い建物が花崗斑岩、新しい建物が砂岩を使用する傾向がある。

地下式倉庫は、小学校敷地に設けた調査区の各所で確認している。形態から大きくA～Cの3つのタイプに分類できる。Aは壁が石積みで、長方形の主体部分に一段浅い突出部を持

つタイプで、3基検出している。掘下げを行っている2基については、底に黄色粘土を貼っており、そのうち1基は壁の石積みの目地に黄色粘土を詰め、もう1基は積み上げた石積み全体を黄色粘土で覆っていた。規模は石室部の長さ・幅が2.0～2.5 m前後で深さ1.7 m、突出部の長さ・幅が1.0～1.5 mを測る。Bは方形の竪穴の底に土台を置くための石を敷き並べるタイプで、2基検出している。竪穴の規模は4.0～4.5 mで、深さ約1.2 mを測る。ほぼ全容が明らかになっている1基については、3.3 m四方に河原石を並べ、その内側を区切るように、東西方向の石列が3列規則正しく配されている。Cは方形の竪穴の底に柱穴を持つタイプで、完全に掘り下げたものは少ないが柱穴の配置も多様であることが窺える。竪穴の規模は2.0～5.0 mと大小様々で、底に黄色粘土を貼る竪穴も存在する。

全国的な事例から、Aは15・16世紀、Bは13・14世紀に多いタイプとされているが、なかでもBは、神奈川県鎌倉市の若宮大路周辺遺跡群で多く確認され、土台や柱などが残存した状況で出土しており具体的な構造が明らかになっている。鎌倉市以外の地で発見されることが少ない遺構と言える。

大形土坑は、基本的に直径1.0～2.0 m、深さ1.5～2.5 mの規模を持つ土坑を呼称しているが、それに準じる規模の土坑もいくつか存在する。第1次発掘調査の西側で検出した大形土坑は、ほぼ南北に列をなしており、断面観察で柱の痕跡を残すものや、底付近に根固め石とも考えられる10～30cmの礫を詰めたものがあるなど、大規模な柵列など大型の構造物が建っていた可能性もある。また、土坑の底からは鏡や銅鏡が出土するものなどがあり、その



第4図 中世の主要遺構配置図

特殊性が窺え、墓穴などであった可能性も考えておきたい。出土遺物から13・14世紀代の遺構と考えられる。

石段と道路遺構は、確認調査(1)・(2)で検出している。石段は旧丹鶴幼稚園の敷地付近より始まり、最下段からは道路遺構となって川方向に下っている。幅は約1.5mあり、南端の石段の天端からは比高差2.4mで、長さ16m以上続くことが明らかになっている。道路遺構の東側は一段高く石垣が積まれている。石垣の石材は基本的に花崗斑岩の自然石で、野面積みされている。石垣は更に下部まで続いており、確認調査(1)の結果からも、検出した道路遺構の下部に古い道路面が存在することが明らかになっている。ただ、道路遺構上面の保護を図るため、下部への全面的な掘り下げは行っておらず全容は明らかでない。道路遺



写真9 掘立柱建物群 (南から)



写真10 地下式倉庫・Aタイプ (東から)



写真11 地下式倉庫・Bタイプ (北から)



写真12 地下式倉庫・Cタイプ (東から)



写真13 大形土坑群 (北から)



写真14 大形土坑断面 (北から)



写真 15 鍛冶炉（南から）



写真 16 道路遺構・石段（北から）

構の両側には東西方向に伸びる石垣を検出しており、階段状に敷地が造成されていたと考えられる。出土遺物から石段・道路遺構は15世紀代のものと考えられ、16世紀代になって上部が整地され、機能を失っている。

鍛冶炉は確認調査（1）で検出している。楕円形もしくは不整円形を呈する土坑の底面が被熱により赤く変色するもので、付近から鉄滓が多く出土することから鍛冶炉と判断した。出土遺物などから15世紀代の遺構であると判断できる。この時期は、石段・道路遺構が機能していた時期であり、また、道路遺構付近からは、鑄造に使ったと考えられる坩堝も出土していることから、道路遺構の両側に造成された敷地では鑄造や鍛冶を行う工房跡が存在していた可能性が高い。

（3）古墳時代の遺構

中世の遺構と同一面の第2遺構面で検出している。検出した遺構には古墳時代前期～後期の土坑のほか、前期頃の竪穴建物と考えられる落ち込みを検出している。

（4）縄文時代の遺構

検出した遺構には土坑があり、縄文土器（中期末頃）や石器などが出土している。

（5）出土遺物

遺物は収納コンテナに約180箱分出土している。近世の遺物としては、陶磁器類・瓦類・金属製品（刀装具・鏡・銭貨）が、中世の遺物としては、土師器・瓦器・瓦質土器・山茶碗・東播系須恵器・国産陶器（常滑焼・瀬戸焼・渥美焼・備前焼）・輸入陶磁器（白磁・青磁・青白磁・施釉陶器）・銭貨・石製品（滑石製鍋・砥石・茶臼・五輪塔・宝篋印塔）・金属製品（鏡・銅鏡・銭貨）のほか鑄造に使った取鍋・溶解炉・鞆の羽口・鍛冶滓などがある。また、古墳時代の遺物には須恵器・土師器が、縄文時代の遺物には縄文土器・石器（石錘・剥片石器）などがある。

3. まとめ

（1）江戸時代

第1遺構面で検出した城下町の道路や石垣からは屋敷地の規模が復元でき、江戸時代初期からの新宮城下町の街路状況や構造を窺うことができる。熊野川沿いで調達できる花崗斑岩をふんだんに使用して城と変わらない様な重厚な石垣を築いているのが大きな特徴で、近世

城下町の都市構造を現在に遺存する重要な遺構であると評価できる。

(2) 中世

検出した中世の遺構には、土坑、半地下式倉庫、柱穴、道路遺構、石垣等があり、出土遺物からこれは平安時代末頃から室町時代にかけて連綿と営まれていると考えられる。南側の微高地を占めて掘立柱建物、地下式倉庫、大型土坑列があり、北側の斜面地には石垣で区画された敷地が階段状に造成されて、その間に熊野川に下る道路遺構が造られている。階段状の敷地では広い範囲に焼土面があり、鍛冶炉などの遺構が検出され、鍛冶滓や坩堝などの遺物が出土する。

遺跡の立地や検出された遺構内容から窺える遺跡の性格は、地下式倉庫が物資を貯える蔵、大型の掘立柱建物が蔵の管理施設で、川近くには鍛冶や鋳造を行う工房跡を配置した中世の川湊である。鎌倉時代の文献史料に「新宮津」が登場しており、諸条件からも遺跡付近に新宮津を充てることができる。この川湊は山間部の物資を集積する機能以外にも紀伊半島南端近くの海上交通の要衝に立地することからも東西日本を結ぶ中継地・物流拠点としての要素が大きく、中世の港湾都市の構造を窺うとともに海上交通を考えるうえでも重要な発見とすることができる。

中世の湊の発掘調査検出例としては、青森県十三湊遺跡や鳥根県中須東原遺跡などがある。また、川湊の調査例としては福井県一乗谷朝倉氏遺跡があり、石敷きの荷揚げ場など湊の施設が検出されている。十三湊遺跡や中須東原遺跡の場合、湊が一区画のみでなく、複数の区画で営まれていることが明らかになっている。新宮城下町遺跡でも、湊の蔵と考えられる地下式倉庫が、広い範囲で検出されており、調査区付近から上流の川沿いに湊の施設が並んでいた可能性が高い。荷揚げ場が連なる景観は、近世から近・現代まで熊野川の河原にあった河原町に近いものであったと考えられる。また、発掘調査を行った丹鶴山の西麓地区は、出土遺物に青磁・白磁などの高級品の出土があることもからも有力層が営む荷揚げ場のエリアと想定される。この地区を管理した有力層については青白磁合子や鏡あるいは五輪塔・宝篋印塔などの遺物により宗教色が読み取れることから、熊野速玉大社の運営に関わる熊野別当家や丹鶴山周辺にあったとされる東仙寺や香林寺（宗応寺）などの寺院を想定することができる。また、室町時代に至っては、堀内氏の存在も無視できないであろう。

(3) 古墳時代

古墳時代としては土坑の他に竪穴建物と考えられる遺構を検出している。同じ頃の集落遺跡としては阿須賀神社遺跡がある。どちらも熊野川に沿う自然堤防上に立地し、後背地となる現在の市街地に水田が展開していたと予想できる。

(4) 縄文時代

縄文時代の土坑などから出土した土器は、中期末頃の北白川C式に併行するものである。縄文土器は新宮市では速玉大社御旅所遺跡や速玉大社境内遺跡で出土しているが、遺構は検出されておらず、市域で初めて確認した縄文時代の遺構と言える。調査した範囲は狭小であったが、縄文時代の生活面は、かなり広範囲に展開していることが予想でき、今後、住居跡等の発見も期待できる。

中世熊野川河口の物流環境

山本殖生 熊野三山協議会

1. はじめに

熊野川河口右岸で発掘された新宮城下町遺跡。その立地などから中世の川湊の存在が指摘されている。

温暖多雨の熊野は、豊富な船材に恵まれ、古くから造船が盛んであった。平安時代後期からの熊野三山参詣でも、熊野川の川舟が利用されている。熊野信仰の隆盛とともに、熊野三山の荘園が全国に展開されたが、その荘園米を熊野に運ぶ武装船団の発達も知られる。熊野水軍・熊野海賊の成立である。新宮津には、熊野速玉社のみならず、中流域の本宮社の米や物資も陸上げされ運ばれたようである。

一方、新宮の対岸鶴殿荘には新宮別当家の一族鶴殿氏がいた。鶴殿氏は新宮や那智の御師として熊野詣の接待をするとともに、新宮の間丸として木材の海上運送にもかかわっていた。その鶴殿城跡は、熊野川や海上交通の見張りの城として機能した可能性が高い。

鎌倉時代、北伊勢の豪族という藤原実重は、各地の社寺に多数の寄進をしているが、熊野詣を三十度行い、度重なる物品(米・牛)などを奉納している。海上交通の利用が想定できる。

戦国時代から近世にかけては、築城や造船などの用材としても熊野材が広く利用された。慶長14年の松島瑞巖寺の用材も熊野山のもので、筏で運ばれたという。

以下、新宮湊が中世以来、米や木材などの物流拠点として賑わった様相を、断片的な文献史料を中心に点描し、その歴史的環境を復元するための一助にしたいと思う。



写真1 熊野川河口部の航空写真(提供:新宮市)

2. 熊野の造船環境

温暖多雨の熊野は、樹木が鬱蒼と茂り船材は豊富である。リアス式海岸と黒潮の荒波を乗り越えて、早くから海民の活動が盛んであった。串本笠嶋遺跡の弥生時代のクスノキ製の船底材がその証左である。牟婁郡からの贅の進上（『日本書紀』「平城宮跡出土木簡」）も、海人の支えに他ならない。

造船説話も生成された。スギやクスを浮宝としたスサノオの神話（『日本書紀』）や、『日本書紀』『万葉集』が記す「諸手船」「真熊野の舟」がそれである。8世紀中頃、「熊野の河上の山に至り、樹を伐りて船を作」っていた村人の説話もある（『日本霊異記』）。熊野川の上流で大型の船が山中で造られていたという。

3. 熊野詣の「川の交差点」

熊野詣の人の流れについて確認しておきたい。平安時代の後期から、熊野三山を巡拝することが多くなる。そして本宮から新宮へは川舟に乗り下った。那智参詣後も再び新宮に戻り、熊野川を本宮に遡上するのが中世までの一般的なルートであった。

その時、新宮での発着場は、速玉社の北方の新宮川原である。鎌倉時代後期の『一遍聖絵』はその様相をよく活写する。しかし、大水時は、川原に横付けしにくかったようで、権現山（千穂ヶ峯）西麓の岩崎が発着場になった。権現山の岩陰が舟着きに適していたようである。三重県側とを結ぶ乙基ノ渡しのあった場所である。

伊勢路を歩いてきた人たちは、中世までは加持鼻王子を至て鵜殿から阿須賀（池田）ノ渡しを経て新宮に着いた。しかし、堀内氏善が巡礼番所を鳴川（成川）へ移すことを了承した文書があり（「堀内氏善書状写」）、鵜殿氏の衰退とともに、堀内氏が新宮城下町形成のためにルート変更を企てたようである。

熊野詣の人々の流れを概観したが、主題の物の流れはどこを拠点としたのであろうか。

4. 熊野山領からの海上輸送

熊野三山の隆盛とともに、熊野の荘園、いわゆる熊野山領が全国に広がった。堀純一郎氏の調査によると、平安後期から鎌倉期を中心に117カ所が上げられている。太平洋海上交通との関係が指摘されており、当然、荘園米などを運ぶ武装船団も発達した。熊野水軍の存立基盤である。またそれを襲う熊野海賊も横行したことも知られる。

その象徴的な説話が『古今著聞集』巻十二「正上座行快海賊を射くこと」に載る。三河国から熊野の米を運送中、伊良湖沿岸で海賊に遭遇するが、弓の名手で後の熊野別当22代行快の働きで賊が退散するという内容である。海賊が熊野の年貢米と知りながら略奪を試みており、行快も伊良湖近海に出没する海賊が熊野出身であると認識して当初は手加減している。海賊も最初から熊野山の行快と名乗ってくれたらこんな失敗はしないのにと捨て台詞を吐いているのがおもしろい。武装船団と海賊の微妙な力関係やかけひきが読める。この年貢米は熊野山領三河国竹谷・蒲形両荘のものと思われ、その立荘から、久安元年（1145）から寿永3年（1184）以前に特定できるという。

5. 新宮湊（津）の利用

では、この年貢米はどこに着いたのであろうか。文学作品ではあるが、『平家物語』巻第四「源氏揃」では、本宮の熊野別当湛増が源氏方の那智新宮の物共を攻めようと、一千人で「新宮の湊」へ発向したが反撃にあい逃げ上ったという。新宮湊が軍事・政治上も重要だったことが知られる。

確かな史料で新宮津が見えるのが、永仁3年（1295）8月の「熊野山日供米配分注文」である。本史料は、『紀伊続風土記』の本宮二階堂家文書に収められ、『鎌倉遺文』にも採録されているが、熊野本宮大社蔵の「古文書類記」に原本の写が伝わっているので、それを掲げておきたい。

熊野山日御供米碧海庄配分事	
合四百玖石五斗者	但自上総国畔蒜庄于 新宮津運賃雜用定
百十四石	占部郷
四十二石八升	中郷
二十九石八斗七升	村高郷
三十五石三斗	下青野郷
二十四石七斗三升	宇祢部郷
四石四斗七升	薬師寺郷
八石六斗五升	橋良郷
二石四斗七升	津々針郷
十一石	下渡郷
七十石五斗	長瀬郷
一石四斗	宿石神郷
五石	小針郷半分
四石二斗	樽戸郷
四石二斗	南小崎三分二
壹石壹斗	同郷三分一
壹石壹斗	牧内郷
三拾八石八斗九升	上戸郷
拾石五斗四升	大支郷三分一
右支配之状如件	
永仁三年八月日	僧判
	尾藤兵衛 六郎分

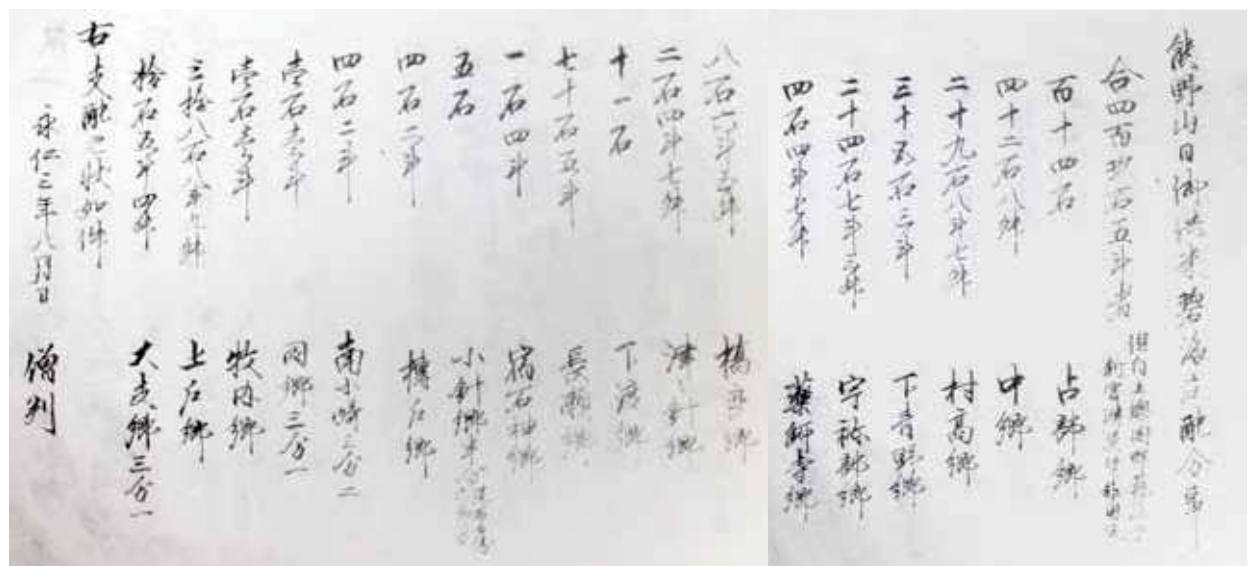


写真2 熊野山日供米配分注文（熊野本宮大社蔵）

これによると、「但自上総国畔蒜庄于新宮津運賃雑用定」とあり、新宮津の文字が確認できる。畔蒜^{あひる}庄から新宮津への年貢輸送に際し、運賃や水手の労賃などの雑用に充てるため、熊野山日御供米の四百九石五斗を、三河国碧海^{おとうみ}庄内の18郷に配分するとの内容であろう。当時、畔蒜庄の領家職は本宮にあった。『吾妻鏡』文治2年(1186)6月11日条には、「熊野別当(湛増)知行上総国畔蒜庄也」とあり、それが確認できる。同史料が本宮社家二階堂・堤家にも伝わっていたことなどから、当庄の年貢米が本宮の支配するところであったことは確実である。

熊野三山の文書の管理システムは不明であるが、那智川河口の川関遺跡が那智山の物資の搬出入の拠点とされているのと同じく、新宮津は、新宮のみならず本宮の物資の流通拠点として機能したと見るのが常識的であろう。



写真3
写真2の一部拡大

6. 新宮問丸鵜殿庄司

新宮の対岸河口部に位置する鵜殿庄は、新宮別当家一族が支配する重要な地であった。新宮別当家出身の23代別当範命の孫に権別当となった長政がおり、はじめて鵜殿氏を称している。長政の子・長真の兄に長存がいて、彼は京の貴族・吉田経俊の熊野詣の御師を勤めた。建長6年(1254)鵜殿法橋(長存)は、経俊の七度目の熊野詣に際し、本宮から下ってきた一行を新宮の「船津」で出迎えている(『経俊卿記』)。

また、一族の者と思われる鵜殿覚賢という人物もいた。彼は少なくとも永仁6年(1298)から6年間は、那智山の長官である那智執行^{しぎょう}の地位にあったことがわかる(『熊野那智大社文書』三)。

鵜殿氏は、熊野川河口部をおさえ、熊野詣ルート(阿須賀ノ渡し)や流域の木材資源などを支配して勢力を伸長させていったのであろう。南北朝時代に活躍する鵜殿庄司家やその水軍力が注目される所以である。

鵜殿氏の経済基盤を考えるうえで興味深いのが、次の「法勝寺公文所注進状」(田中家文書)である。

貞和2年(1346)、京都法勝寺から出された注進状に、「新宮問丸鵜殿庄司」の文言が見える。そのころ法勝寺は、塔造営の柱の材木を探していた。莫大な費用を熊野の杣人藤宇七郎に渡して、大柱三本を撰津渡辺津に運ぶことになり、新宮で法勝寺と東福寺の問丸(倉庫・運送業)を兼ねていた鵜殿庄司の証明書を発行してもらい、渡辺津を経て京都の淀津に運んだというもので、その時のトラブルの様子も記されている。

鵜殿庄司は、熊野山中の杣人たちとかかわり、新宮に問丸を展開し、河口部を押える「湊の長者」「水軍領主」として、鵜殿城(海と川の見張りの城)を築くなど、勢力を誇ったのである。

法勝寺公文所注進

東福寺僧修造司納所直歲已上不
知名字 已下於淀津令默點定取
当寺御塔大柱三本条罪科不輕事

右為御塔柱、為大勸進惠鎮上人之沙汰、令下行莫太之

料足、仰熊野山杣人藤宇七郎、相副新宮問丸兼東福
寺問 鶉

殿庄司送文、令運送大柱三本
一本長四丈五尺、口三尺二寸
一本長四丈二尺、口三尺八寸
一本長三丈五尺、口三尺 着

渡辺浜畢、仍御寺問丸大藏入道、彼三本内先二本就為

急用去月廿九日令着淀津之処、彼寺僧徒直歲已下數十

人群下、無故令默點取之、預置彼寺問丸畢、此条在地近

隣無其隱、各驚耳目者歟、就之大勸進上人内々雖被問

答、終以不令承引、結句欲運取之間、先為鎮物忌之沙

汰、内々依被申武家被立使者云々、俗人尚以可有斟酌

況於僧徒哉、無法之自專頗非尋常儀歟、所詮且嚴重造

營之料木也、且今明既欲取立之大柱也、旁争可及自由

之沙汰哉、為公方御沙汰急速可被渡寺家者也、次於張

行僧徒者、路次默點定之罪科難遁者歟、仍注進如斯而已

貞和二年十二月二日



写真4 法勝寺公文所注進狀 (三重県・『田中家文書』)

7. 藤原実重の寄進

三重県四日市市の善教寺の阿弥陀如来立像には、鎌倉時代の北伊勢の豪族と思われる藤原実重の胎内納入文書が多数伝来し有名である。そのうち「作善日記」には、彼が伊勢や熊野などに奉納した多数の經典や膨大で様々な物品が記されている。

たとえば、承久3年(1221)6月に「くまのへうし(牛)一つまいらす」、嘉禄3年(1227)12月8日「くまの、しんく(新宮)のみかくら(御神楽)に米五斗まいらす」、天福2年(1234)「くまの、しんく(新宮)のたう(堂)のほうか(奉加)に米六斗、十二月十五日まいらす」、延応元年(1239)「くまの、みつのおんやま(御山)にてそうく(僧供)、三十石にて一山二十石つゝ、」などとあり、量的にみて海上運送が想定され、新宮津で陸上げされた可能性が考えられる。

実重は、仁治2年(1241)には「くまの三そこんけん(所権現)へ三十と(度)まいりの事」と記しており、やはり船での熊野参詣だったと思われる。

8. 熊野材の利用

武蔵国金沢称名寺の修造で、14世紀初頭、「熊野檜皮」の調達に関する文書が教点確認できるといふ(「金沢貞顕書状」)。中世、熊野の林産物が遠くまで運ばれたことが確認できる。

熊野材は、古代以来、熊野三山の造営や水軍船の建造など、その需要は少なくなかったと思われる。とりわけ、全国統治が進められた近世初頭、熊野材の質と量が為政者に着目されたことは確かである。以下、管見の事跡を簡潔に列記し結びにかえたい。

①天正11年(1583)、大坂築城材(『尾川文書』)②同14年、京都方広寺大仏殿用材(『宗国史』)③同16年、木材奉行の平介大坂へ2万本売る(『多聞院日記』)④同18年、朝鮮出兵の船100艘の建造(『岡家文書』)⑤文禄3年(1594)、伏見城用材の搬出(同)⑥慶長9年(1604)、江戸城普請のための石船385艘の造船(『徳川実紀』『済美録』)⑦同10年、浅野幸長、紀州室郡よりの出材奉行を任命(『済美録』)⑧同13年、駿府城本丸経営のため熊野の山々より良材を伐出(『徳川実紀』)⑨同14年、松島瑞巖寺を熊野山より材を取って造営(「同棟札」「松島方丈記」)。



写真5 「松島方丈記」(提供：松本純一氏)

9. まとめと課題

熊野の造船環境と熊野信仰の隆盛を背景に、熊野川河口では、船による交通と流通が盛んであった。特に全国の熊野山領からの年貢米の搬入と、熊野川流域の豊かな木材資源がその中心になったことは確かである。

中世の新宮津に関する物流の確かな史料は、永仁3年(1295)の「熊野山日供米配分注文」のみである。しかし、本宮への年貢米が陸上げされたと思われ、新宮津が新宮社のみならず本宮の外港として機能したであろうことが理解できた。

鵜殿氏が問丸として熊野川流域の木材資源の流通にかかわり、それを経済基盤として勢力を培った様相も垣間見えた。ただ、鵜殿氏の拠点が、阿須賀ノ渡しの発着場にもなった中世港湾とされる池田港だった可能性もあり、注意を要する。

船を利用した熊野詣や物品の寄進が多くあったと思われるが、史料が少ない。その中で藤原実重の「作善日記」は、船とは断定できないが、貴重な記録といえる。

近世初頭にかけての熊野材の夥しい搬出・利用は、中世以来、熊野が東西太平洋交通の要の地として機能した立位置を解明にするうえで貴重な事跡であろう。

今後の中世港湾新宮津の追究は、考古学的成果を基軸に、熊野の宗教史や政治・軍事・経済史など、広範な史料の博搜が求められている。

[主要参考文献]

山本殖生 2006 『世界遺産“川の参詣道”熊野川の魅力』 自刊

網野善彦ほか 1992 「伊勢と熊野の海」『海と列島文化』第8巻 小学館

堀純一郎 1997 「熊野三山領荘園の諸相—平安後期から鎌倉期の考察—」『田辺市史研究』第9号

綿貫友子 2001 「紀伊国における中世海運—中世海運における紀伊半島の位置付けを探るために—」『歴史科学』165号

阪本敏行 2005 『熊野三山と熊野別当』 清文堂出版

高橋修編 2009 『熊野水軍のさと—紀州安宅氏・小山氏の遺産—』 清文堂出版

伊藤裕偉 2011 『聖地熊野の舞台裏—地域を支えた中世の人々—』 高志書院

四日市市 1995 『四日市市史』第十六巻 通史編古代・中世〔別冊〕善教寺文書

新宮城下町遺跡にみる中世都市の諸相 — 港と蔵の風景から —

鋤柄俊夫（同志社大学 文化情報学部）

はじめに—新宮城下町遺跡の特徴について

- 1、中世の港町と、その遺跡
- 2、中世の蔵遺構
- 3、神の湊と人の港

まとめにかえて—中世の新宮湊を探索する

はじめに—新宮城下町遺跡の特徴について

（1）発見された主な遺構（図1）

- ①蔵と考えられる方形竪穴建築址
- ②熊野川へ向かう石列の道路跡
- ③江戸時代の地割り（町割り）と異なる地割り（町割り）

（2）出土した主な遺物

- 12世紀：常滑窯甕、渥美窯系壺、山茶碗、中国製の白磁四耳壺・碗
13世紀：常滑窯系捏鉢、常滑窯甕、山茶碗、中国製の青磁碗、中国製の白磁皿
14世紀：
15世紀：備前窯播り鉢、古瀬戸窯卸目付き大鉢、中国製の青磁碗
16世紀：備前窯播り鉢、瀬戸美濃窯播り鉢、中国製の染め付け
17世紀：瀬戸美濃窯志野

（3）特徴と検討課題

- ①港町の遺跡であろう（おそらく船着場に降りる15世紀の道があった）。
- ②複数の蔵があった（館の蔵か、町の蔵か）。
- ③鍛冶や鑄造に従事した職人がいた（金属の加工工場か、船の修理などの工場か）。
- ④南北朝期（14世紀）の前後で出土陶磁器の様相に変化があった可能性。

◎これらの疑問を検討

1、中世の港町と、その遺跡（『日本歴史地名大系』を参考に）

（1）堺

摂津国住吉郡と和泉国大鳥郡の境界。「境」と称し、のち「堺」。惣鎮守である開口神社は住吉社の別宮、住吉神を祭る集団が漁業集落を形成。

室町時代には山名氏清の根拠地。明徳の乱後は大内義弘が守護で、大いに繁栄。応永の乱に足利義満に攻められる。文明元年（1469）帰朝の遣明船が堺に入港して以降その発着地。堺商人が次第に活躍するようになり、南蛮貿易の一大中心地。永禄11年（1568）織田信長に屈服して濠を埋める。豊臣秀吉の全国統一事業の経済的拠点。開口神社は延喜式内社。祭神は塩土老翁神（海上交通を支配し、山幸彦に海宮のありかを教える）・素盞鳴神・生国魂神の三神。

續伸一郎氏は、蔵を港湾都市の象徴とする。少なくとも14世紀中頃には、砂堆上の頂上部に形成された南北方向の「大道」に面して礎石建物が建てられる。遅くとも15世紀中頃から後半に、「大道」に交差する「路地」がつくられ、裏地の開発が本格的に着手され始める。15世紀後半～16世紀前半にかけて、この地に博列建物が出現（3分の1ほどを地表面に露出させて下の1～3枚を縦積みで地中に埋めている。蔵と考えられている）。区画溝や塀などの境界明示が不明瞭で、表側建物所有者数軒単位の共同所有であったと考えられている。

★続伸一郎 2010「港湾都市 堺における蔵遺構」『都市と城館の中世』
＜キーワード＞境界・広域流通・宗教・蔵

（2）兵庫津

古く大輪田泊といわれ鎌倉時代末期以降兵庫津。瀬戸内海の重要港の一つとして行基が指定したと伝え、平清盛は大輪田泊を国際貿易港として発展させようとした。重源は東大寺の再建過程で建久7年（1196）修復。叡尊は弘安8年（1285）兵庫の安養寺で菩薩戒を授けたという。一遍は正応2年（1289）和田岬の観音堂でその生涯を閉じ、のちに真光寺が建立される。

応永8年（1401）足利義満は明に国交を求め、翌年に帰還船とともにやってきた明船の見物と称して娘を伴って兵庫に下向。義満は兵庫に土蔵を建てている。

応仁・文明の乱で港湾機能が大損害。同年に²⁵帰朝した遣明船が瀬戸内海を航行できずに南九州から土佐に入り、堺に帰着。対外貿易港の地位を堺に譲る。

浜崎地区18区トレンチから、東西8.5m、南北7.5mの長方形石組（SX81）が発見された。数十cm大の礫が外側を巡り、内側に小礫を敷き詰め、中央部の小礫群の下にはさらに大ぶりの石敷。16世紀前半。兵庫津の港湾機能を担った「浜方」の中心部と推定。

★岡田章一 2008「一般国道2号共同溝整備事業に伴う兵庫津遺跡の発掘調査」『兵庫津の総合的研究』大手前大学史学研究所

＜キーワード＞境界・広域流通・宗教・蔵・（湊川の河口）

（3）中須東原・西原遺跡

益田川河口左岸の砂丘後背の低湿地に立地する港湾を中心に発展した14世紀～16世紀の遺跡。15世紀代の朝鮮半島産の陶磁器やタイ産の陶器も認められる。益田氏の強い関与が想定される。舟着場の背後の町屋部分は街区が形成され、倉庫や港湾管理施設の掘立柱建物が建ち並び、長期間にわたって建て替えが繰り返された。中須西原遺跡では、その一角に方形竪穴建物が存在し、中須東原遺跡では、中心的な建物と考えられる建物を中心に、貿易陶磁が多く出土。中須西原・東原遺跡には多くの鍛冶工房。湊町として造船や船の修理に必要な釘や鋸などの製作に関わる鍛冶師も内包していたと思われる。個々の遺構は小規模ではあるものの、消費レベルを超えた密集度ともいえ、「大中洲鍛冶名」に直接結びつく可能性が考えられている。

★「文化遺産オンライン」<http://bunka.nii.ac.jp/index.php>

★木原光 2013「湊町を特徴づける遺構」『中須東原遺跡』益田市教育委員会

<キーワード>河口・広域流通・蔵・職人・(福王寺：宗教)

(4) 上ノ村遺跡

仁淀川の河口近くに位置し、北に新居城をあおぐ。鎌倉政権は土佐に対して佐々木氏や三浦氏など海運との関係が強い〈海の領主〉と呼称すべき守護職を投入、当該期の太平洋は、瀬戸内や日本海と共に「海の道」として重要な物流動脈を形成。内陸部ではほとんど例を見ない紀伊型甕や吉備型椀などが出土。仁淀川流域の中世の中心舞台は高岡で12～13世紀が盛行期。上ノ村遺跡は中心地の繁栄を支えた川津に営まれた交易を生業とする集落。護岸石垣の確認長は全長244m以上。本体部分の残存幅は2.5～6.6m、高さは川上側で2.1m、下流側の端で4.1mを測る。下流側端部での幅は5.6m。江戸時代初期。

★出原啓三2010「川津」としての上ノ村遺跡と「海上の道」『上ノ村遺跡』I高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター

★高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター2012『上ノ村遺跡』VI

<キーワード>城・広域流通・河口

(5) 川と港の風景

①川西遺跡

鎌倉時代から室町時代にかけて構築された石積護岸。漆器椀や下駄、扇、将棋駒、齋串、人形などの祭祀品、建築部材や木彫の蓮花などの木製品、独鈷杵の鋳型。製作途中の木製品、土器製作の際の失敗品が出土。護岸施設に隣接して様々な工房や建築木材の加工場があったと推定。紀伊水道から府中地区へ入る第2のルートに伴う港湾施設。「八万」は元暦2年(1185)に摂津渡辺津から船出した源義経一行が上陸した八万余戸浦に関わるとも。隣接地には、京都市峰定寺所蔵の永仁4年(1269)銘の梵鐘に記された「阿波国以西郡八万金剛光寺」があったとされる。

★鋤柄2010「園瀬川と万之瀬川」『日本中世都市遺跡の見方・歩き方』昭和堂

<キーワード>宗教

②東福寺城と稲荷川

稲荷川河口の北側の標高113mを最高地点とする北から南に延びる山城跡。暦応4年(1341)の史料に東福寺城とみえる。暦応3年までは南朝方であったが、翌年制圧し島津氏の拠城。貞和3年(1347)南朝方の熊野・中国・四国の水軍らが海陸から襲ったが退けた。薩摩のなかでも重要な拠点とされ、島津貞久は文和3年(1354)以前に子の氏久を入れた。

<キーワード>河口・城

③浦戸城と長浜川

浦戸湾口に西から突出した半島状の地の先端部近くに立地。長宗我部氏最後の居城として著名。天正13年(1585)、長宗我部元親は豊臣秀吉の軍門に降り、土佐一国の知行が認められ、居城を大高坂山に築いたが、城下町の治水工事が成功せず同19年頃に浦戸城に。浦戸湾口に近い長浜の雪隠寺は臨済宗妙心寺派の四国霊場八十八ヶ所の三三番札所。永禄11年(1568)長宗我部元親が薬師堂を建立。慶長4年(1599)長宗我部元親は京都伏見で没し、当寺を長宗我部氏の菩提寺と定めた。

<キーワード>河口・城・宗教

④浅草寺と隅田川

浅草は、推古天皇の時代に檜前浜成、竹成の兄弟が、隅田川の河口近くで引き上げた一体の仏

像を、土師真中知と共に簡単な草堂をつかって祀ったという。武蔵国分寺の文字瓦に豊島郡の土師角麻呂という人物が、浅草から80キロほど上流にあたる武蔵の那珂郡に檜前舎人石前という人物が知られ、すぐ北に、隅田川を遡る時の目印の待乳山。浅草は豊島の郡衙に対する陸上交通の要衝であり、同時に総武相（上総・下総・武蔵・相模）の内海を代表する河口港でもあった。

★森浩一・網野善彦 2000『日本史への挑戦「関東学」の創造をめざして』大巧社

<キーワード>河口・宗教・広域流通

3、中世の蔵遺構

(1) 鎌倉の地下蔵

13世紀第2四半期に出現して15世紀以降にはみられなくなる。最初は鎌倉中心部にみられ、13世紀後葉頃から海岸部に広がる。堅穴建物の中心的な用途と役割は、膨大な量の鎌倉石が使われて、その構築に莫大な資本の投下がなされていた可能性と、未使用で一括に出土した龍泉窯系青磁碗の発見から、物資流通のターミナルとして商品が運び込まれた倉庫。

「浜の倉」、明確な区画施設をもたない屋地毎に多くの堅穴建物。

「町の倉」、特定の屋地に連綿と堅穴建物が作り続けられるような区画。

★鈴木弘太 2013『中世鎌倉の都市構造と堅穴建物』同成社

<キーワード>浜の倉と町の倉

(2) 京都の地下蔵

・平安京左京五条三坊九町

地下式倉庫370は、東西約4.8m、南北約2.6m、深さは約1.25mで、0.2m前後の厚さで床土が貼られている。北壁沿いと南壁沿いに壁板を固定したと想定できる杭穴、床面の堆積土壌から麴菌がわずかに採取されている。時期は13世紀後半である。麴室の可能性

地下式倉庫450は、東西約3.2m、南北約3.3m、深さは検出面から1.7mで、壁沿に直径0.2～0.3mの柱痕跡が残る。埋土から13世紀前半の土師器や輸入磁器が出土している。

13世紀末から14世紀中頃には綾小路に面して建物が建ち、その奥に地下式倉庫と常滑大甕を埋めた東西6列、南北6列の埋甕群（蔵）が造られる。

★鋤柄 2011「館の蔵と都市の蔵」『中世人のたからもの』高志書院

<キーワード>工房の蔵

(3) 大坂の蔵

大坂城惣構の北西隅にあたる中央区京橋三丁目地点で見つかった屋敷跡から、大坂夏の陣の焼土層に覆われて9棟の建物が見つかった。屋敷の広さは、東西40m、南北50m以上。蔵と推定されている建物2は2～4cmの礫を多く含んだ土が厚く敷かれている。建物3は、15～21個の大甕が埋められていた蔵で、炭化米も多量に出土しており、米蔵と推定されている。

★鋤柄 2011「館の蔵と都市の蔵」『中世人のたからもの』高志書院

<キーワード>館の蔵

(4) 博多の蔵

蔵の基礎と考えられる遺構は、博多浜北部に14世紀に現れ、15・16世紀には息浜に進出し数も多くなる。方形や長方形の掘り込みの壁面に礫を積み上げるもので、16世紀以降から近世にかけて多くみられる。それ以前の地下蔵と思われる遺構に方形堅穴遺構がある。一辺2m四方の方

形プランの掘り込みで、四隅に杭の痕跡や柱穴、礎石などがみられる。

★田上勇一郎 2008「蔵・便所」『中世都市・博多を掘る』海鳥社
＜キーワード＞港の蔵

4、神の湊と人の港－中世の港町のふたつの姿－

(1) 三津七湊

『廻船式目』は、長い海上の慣習をふまえて成文化された日本最古の海商法規。貞応2年(1223)3月16日、摂津兵庫の辻村新兵衛、土佐浦戸の篠原孫左衛門、薩摩坊津の飯田備前の三人が北条義時に召し出され、船法をたずねられ、三十一カ条の船法の事を申し述べ、義時が袖判を与えたと記されている。

三津：伊勢姉津（安濃津なるへし）、博多宇津、泉州堺津（薩摩坊津）

七湊：越前三国、加賀本吉（イマ三馬なるへし）、能登輪島、越中岩瀬、越後今町、出羽 秋田、奥州津軽十三湊 天正9年（越前三国に伝わった『廻船大法の巻』）

住田正一 1942『廻船式目の研究』東洋堂

★これまでの事例をふまえた遺跡から見た中世の港町の特徴とは

- ①境界（堺、兵庫）
- ②広域流通品（堺、兵庫、上ノ村、中須東原・西原、浅草寺、**新宮**）
- ③蔵（堺、兵庫、中須西原、鎌倉、大坂、博多、**新宮**）→町・工房・館
- ④宗教（堺、兵庫、中須東原・西原、川西、浦戸城、浅草寺、博多、**新宮**）
- ⑤城（上ノ村、東福寺城、浦戸城、大坂、**新宮**）
- ⑥職人（堺、中須東原・西原、川西、鎌倉、博多、**新宮**）
- ⑦大河の河口（七湊、兵庫、中須東原・西原、上ノ村、東福寺城、浦戸城、浅草寺、鎌倉、大坂、**新宮**）

→中世日本列島の港遺跡の多くの要素が新宮にあてはまる

→ただし中世の港町には、2つの姿があった

(2) 放生津－神の湊－

放生津は、富山平野を東西に二分する呉羽丘陵の西方、射水平野北端の海岸部に位置。港湾施設の立地は、内川や放生津潟・西潟の沿岸が当たり、放生津八幡宮南西には「舟入」、西潟東岸には「舟附」という港湾施設の存在を示唆する小字。

平安時代末期から鎌倉時代前期、荘園からもたらされる年貢公事等の輸送請負者として、12世紀以降、日吉・気比神人達。日吉神人は国府対岸の六渡寺、気比神人は華山王社気比社。13世紀中葉以降、西潟東岸の曾根の地に真言律禅興寺が進出。14世紀初頭、放生津の西に臨済宗法燈派の興化寺が進出する。真言律宗・臨済宗法燈派は、共に各地での港湾施設をはじめとした社会資本整備で知られている。13世紀末、時宗道場報土寺が設けられた。

14世紀中葉、越中国府が衰退。越中守護所の焼失と放生津の荒廃・復興、幕府による闘所地処分によって放生津に石清水八幡宮勢力が伸張。

★金三津英則・松山充宏 2015 「中世放生津の都市構造と変遷」 『中世日本海の流通と港町』 清文堂
<キーワード> 並びたつ寺社と浜のイメージ

(3) 豊後府内一人の港一

豊後府内の 16 世紀の空間構造を大分川を中心に分析した鹿毛敏夫氏は、大分川と平行して東西に走る三本の幹線道路を軸にした三つの空間を、「都市の前衛空間」「都市の中核空間」「都市の後衛空間」「都市の外港空間」と設定し、それぞれ流通や交通の動脈である大分川と一体化した市町と万寿寺の門前、大名館や大名蔵から構成される府内の繁栄と国際性を象徴する空間、大名権力ゆかりの宗教的楼閣を統治権力の象徴とした権威的空間、近隣郊外の河口に位置して、水上または陸上交通路によって都市とむすばれた空間とした。

これらの空間構造は、同時期の京都上京でみられた空間構造や一乗谷朝倉氏遺跡の空間構造に通じるもので、中世都市の基本的な構造。

この中で注目されるのは、最も大分川に近い「都市の前衛空間」で、徳治元年（1306）に大友氏第四代の貞親が、聖一国師の弟子の直翁を開基とする万寿寺を中心に寺小路町、上市町、工座町、中ノ町や下市町がならぶ。鹿毛氏は、この地区が 16 世紀に最も栄えた中世都市豊後府内の発祥の起源とする。

[都市の中核部] 大名館と大名蔵の存在を推定。[館の蔵]

[都市の前衛空間] 万寿寺の門前町から形成された市町にも蔵があったと推定。[町の蔵]

★鹿毛敏夫 2008 年「川からの中世都市」 『戦国大名大友氏と豊後府内』 高志書院
<キーワード> 城や館と港のイメージ

まとめにかえて—中世の新宮湊を探索する

(1) 「新宮の中世と速玉大社」に学ぶ新宮の 3 つの時代

新宮地方の中世は、文献史料の上ではおおよそ 3 つの時期に分けて考えることができるだろう。まず最初の時期は、熊野別当家の活躍した 12 世紀後半から 14 世紀前半である。承保 2 年(1075)、長快が別当に就任すると、別当職はその子孫によって世襲され、新宮地方はその一流、新宮別当家の勢力下にあった。

続く第 2 の時期は、14 世紀後半から 15 世紀にかけての遷宮と造営の時代である。もちろん、遷宮と造営は古来より行われていたが、今に残る壮麗な古神宝類が調進され、また、その前後に造営に関わる文書が多く残され時代として、やはり象徴的な時代といえよう。

第 3 の時期は、熊野七上綱と呼ばれた奥熊野地方の領主たちの中から、堀内氏の台頭が次第に顕著になる 15 世紀後半から 16 世紀である。この時代はまた、熊野新宮本願所による全国的な勧進が行われた時代でもあった。

★和歌山県立博物館 2005 「新宮の中世と速玉大社」 『熊野速玉大社の名宝』

<キーワード> 新宮の 3 つの時期区分

(2) 年表で考える（『新宮市史』、永島福太郎 1998 「中世の熊野地方 熊野別当の活躍」・「戦国乱世の熊野」 『熊野三山信仰事典』 戎光祥出版）

1082 熊野山の大家 300 余人が新宮と那智の御輿を奉じて粟田山に集まり尾張国官人の責めを強訴

- 1159 平清盛が熊野参詣の途中に源義朝らの挙兵を聞いて切部（田辺？）宿より帰京。湯浅宗重が軍勢を提供し、別当湛海は鎧などを送る。熊野三山造営のために遠江を造営料国とする
- 1160 後白河上皇の発願により熊野の御正体を洛中の今熊野に勧請。筑紫(福岡県)彦山から出羽(山形)羽黒山にわたる修験道諸山の総本山とした。後白河上皇がはじめて熊野参詣。
- 1161 三井寺覚忠の三十三所巡礼記に「一番、紀伊那智山」
- 1180 八条院蔵人源行家（新宮十郎）（姉は源為義の女丹鶴姫）が伊豆国北条館へ行き、以仁王の令旨を源頼朝に伝える。別当権湛増（丹鶴姫と湛快の間の子といわれ）が謀反。民家数千を焼く。「平家物語」に「新宮の湊」
- 1181 熊野衆が50艘ほどの軍勢で伊勢に進攻。
- 1185 源頼朝が三河国竹谷を熊野山の僧に還付。湛増が義経に従って渡辺から阿波に至り屋島を攻略。壇ノ浦に湛増が参会。其勢二千余人、二百余艘の舟に乗云々。源行家・義経追討の院宣が頼朝に下る
- 1187 後白河川法皇、熊野詣の用途を武蔵・上総に
- 1208 北条政子が熊野に参詣
- 1209 阿波を造営料国とする
- 1210 北条義時の妻が熊野に参詣するについて
- 1218 北条政子、熊野参詣のために上京する
- 1219 熊野山の悪徒が志摩国の島々に乱入
- 1241 遠江を造営料国とする
- 1256 新宮十郎行家末裔の行吉や堀内、箕嶋諸家おこるといふ
- 1270 新宮十郎行家末裔の行吉の居館上棟
- 1271 熊野の堀（堀内）出雲から出火
- 1272 堀出雲が居館建てる
- 1276 新宮の箕嶋民部上京
- 1279 熊野神人、神輿を奉じて伊勢阿濃津にいたる
- ★1282 31代で正湛にて跡目なく熊野別当家断絶
- 1284 正湛改め宮崎豊後と号し別当代を庵主にゆずる。丹鶴寺には110石ほかを寄進。別当一家五人衆を熊野惣地に配して箕嶋・矢倉は神宮（新宮社）、宮崎豊後は衆徒・長床を司る
- ★1306 阿須賀の熊野川渡船を成川（三重県紀宝町）に変更し、往来の人道もなおす
- 1320 尊氏の父の貞氏が高坊を御師とする
- 1322 新宮へ大釜が寄進される。大檀那鎌倉高時
- 1325 新宮大雄禅寺の鯨鐘が鑄造される
- 1327 実心・秀海が宝篋印塔を建てる（宗応寺）
- 建武新政。熊野三山では衆徒が社家と称する。那智山を除いて衆徒は法体を棄てて俗体となる
- 1335 後醍醐天皇が美作国田邑地頭職を新宮に寄進
- 1336 足利尊氏、新宮神宮に伊勢国御山戸を、新宮衆徒に伊予国西条を与える。新宮の宮崎豊後と矢倉と箕嶋に足利尊氏の下文届く
- 1338 熊野勢が花園・牧両宮を護衛して四国に渡り、伊予水軍を呼応
- 足利將軍家歴代の熊野山崇敬が確立

熊野山の御師先達による師旦組織が全国的に

★1340 紀伊国秦地、塩崎一族に周防国竈門（かまど）関より摂津国尼崎まで西国の運送船を警固させる。新宮別当湛誉ほかが脇屋義助を淡路の武嶋へ兵船をしたてて送り備前児島に「太平記」。（備前児島は児島山伏の蟠居地、熊野衆が往来）。

1342 鵜殿庄司ら南軍に応じ、土佐の花園宮に加勢

1347 南朝軍、熊野水軍を率いて薩摩国東福寺を攻める

1351 南朝、播磨国栗栖庄地頭職を新宮に寄進

1351 阿波国で竹原庄地頭職を給恩

湯川庄司の一族といわれる安宅氏は四国の細川頼春に投じた。

1354 後光厳上皇、新宮衆徒らの奏請により安房・遠江を寄進

1366 新宮社を上棟、土佐国大忍庄を造営料国

1379 長慶天皇、新宮に阿波国日置荘地頭職を寄進

1382 南軍、新宮神官を攻め鵜殿城、船田、鳴河（成川）、那智山坂本で合戦

★先達（道者）らの熊野詣がさかんになる。先達らを配下として御師活動に当る衆徒（社僧）が中心となり、三山それぞれ組織を拡充。

熊野別当の称が消える。熊野別当一族は衆徒ないし土豪（庄司）として発展

本宮は修験道場化、那智山は衆徒（社家）支配、新宮は神官・衆徒の両支配

新宮や本宮では僧兵色を濃く。新宮衆徒は在地領主（地侍）化を進め、氏姓を称する

★新宮には阿波小松島からの材木船の到来が知られる

足利家は熊野三山の先達による御師・旦那の師旦組織の全国的展開を助成

1384 新宮山総神官ら義満に神宝調献を訴える

1390 熊野速玉神社の金銀装鳥頭太刀ができる

1400 新宮七人上綱位階を受ける。宮崎長門守、矢倉民部大輔（矢倉明神南）、中脇兵庫（矢倉の子息）（永田牛之助の所）、箕嶋左京大輔（東仙寺または別当屋敷）、楠内膳、滝本式部（利生院・矢口彦四郎）、芝坊宮内（東忠兵衛）、堀内散位氏俊

1401 新宮の社人に知行を加える。堀内1万、宮崎一万、矢倉・箕嶋5千、楠8千、滝本・芝各5百、中脇3百ほか

1427 足利義満側室北野殿一行が熊野参詣

1442 熊野に大風。庵主と「堀内居館」に浸水。南側山腹からの溢水は熊野河口を7カ所切る

1452 ★宮崎一族が没落。跡目に恵まれないまま新宮社人泰地重造二男を迎えようとしたが、「綱堀内」が難色を示す

1465 藤原定弘が新宮東仙寺を再興

1474 新宮社遷宮（大旦那源義尚）

1495 藤原盛定（新宮田鶴原宮崎方寄寓）が東仙寺を修復

1498 大地震。宮崎居館（田鶴原）崩壊、堀内居館で出火

文亀2年(1502)の「新宮」文書、在庁と番頭衆が盟約。番頭衆は鮎田一大夫高政、石垣二大夫行包、西之三大夫高清、楠木四大夫広治、五番頭石垣継包、六番頭鵜殿、七番頭羽山忠基、八番頭泰地頼久、九番頭泰地実種。十番頭楠木正治が見え、これに在庁石垣重包が連名

1561 毛利元就の代参として小早川隆景が新宮社に

- 1562 本宮竹坊、尾崎坊、篠坊、杉坊らが、新宮の堀内、箕嶋、宇殿、中脇、芝、宮崎、滝本、泰地、榎本、山本、上野、庵主らに珍物をおくる
- 1564 毛利元就より新宮社に宛て同社庵主を宿坊とすることを通知
- ★1565 鳴川（三重県紀宝町成川）に渡し場をつけかえし、巡礼番所も移転
- 1571 新宮周防守行栄が下熊野地から転居、高芝が居館の大門を建てる。新宮新地に七人衆は新屋（本廣寺）と呼ぶ。新宮十郎行家の末裔という
- 1572 堀内の息女が鶴殿孫重郎に嫁ぐ。堀内が鶴殿孫重郎と大居城をせめる。堀内3万石、鶴殿千石
- 1574 堀内氏虎が長男の氏義（氏善）にゆずる。氏虎、田鶴原に埋葬し、宗応寺清洞庵で大法要。堀内の威勢大いにあがる
- 1575 堀内氏義が尾鷲市の三木城を攻める
- 1576 堀内氏善が長島城を攻める
- 1580 堀内が三重県紀宝町の浅里西東ヶ城を攻める
- 1581 織田信長が熊野新宮神主堀内新次郎に知行分同社領地を安堵。堀内が那智の色川衆を攻める
- 1583 堀内の軍勢が湯川衆などを討ち取る
秀吉の大坂築城に、氏善は木材を献進する
- 1588 豊臣秀長の命により、堀内氏善らが北山征伐
- ★1590 新宮で朝鮮渡海の船 100 艘を造る
- 1592 堀内安房守大将として 574 人を率い新宮港を発向
- 1594 伏見城用材として新宮領北山材を使う
- 1596 秀吉が新宮社造営をはじめ
- 1600 関ヶ原では西軍に
浅野右近大夫が新宮城に、堀内若狭・嘉藤次が残留

★年表のまとめ

1 期：12・13 世紀—阿須賀渡の時代—

新宮別当の時代

東海と源氏および鎌倉との連携

2 期：14 世紀—成川渡の時代—

熊野別当家が廃絶、宮崎氏の登場、新宮衆徒の在地領主化

室町将軍との連携、四国（阿波）および瀬戸内との連携

3 期：15・16 世紀—成川渡の時代—

堀内氏の登場と宮崎氏の没落、そして堀内氏の成長

室町将軍との連携、毛利・秀吉との連携

（1565 年に（再度？）成川の渡し場を付け替える？）

（堀内氏については、寛正年間（1460～1465）に、畠山氏から堀内を頼みとせる、の文書あり、新宮を追われ伊勢に逃れて（大殿郷か）雌伏したという。また延徳3年（1491）に新宮堀内氏に関係する文書あり。なお、堀内氏重は天文年間（16 世紀前半）に新宮城に入ったかとも）

(3) 新宮城下町遺跡の特徴に対するひとつの解釈

①港町の遺跡－遺跡と文献にみる複数の港町の姿－

1期 (12・13世紀)

文献：阿須賀渡、別当の時代、東海・鎌倉とのつながり

遺跡：掘立柱建物群・Bタイプ地下式倉庫→博多や放生津や丹後宮津との比較

2期 (14世紀)

文献：成川渡、宮崎氏の時代、瀬戸内・四国とのつながり＝備前焼との関係？

遺跡：掘立柱建物群・Bタイプ地下式倉庫→博多や放生津や丹後宮津との比較

3期 (15・16世紀)

文献：成川渡、堀内氏の時代、足利政権とのつながり

遺跡：船着場への道・Aタイプ地下式倉庫→豊後府内との比較

②複数の蔵

明瞭な区画を持たな方形堅穴→鎌倉の「浜の倉」、豊後府内の「町の蔵」との比較

③鍛冶や鑄造に従事した職人

中須東原遺跡との比較→遍歴する職能民の姿 (1590年に新宮で船100艘を造る)

④南北朝期 (14世紀) の前後で出土陶磁器の様相に変化があった可能性

石川県の珠洲焼きと白山社神人との関係の比較で備前児島の新熊野社の役割を検討 (室町時代、瀬戸内に熊野丸の称を掲げた商船が知られる。備前児島党がこの称を用いた例証もある)

⑤市内出土陶磁器の発見場所について (図2)

熊野古道沿いで南向き斜面の麓に分布→中世の館の立地にふさわしい場所

→新宮の有力者の館跡を示すか

(4) 今後の「新宮津」研究への期待

①新宮の港町の実態は、今回の調査地だけでなく、鶴殿も含めた熊野川河口全体を視野に入れた検討が必要ではないだろうか。

(伊藤裕偉 2007『中世伊勢湾岸の湊津と地域構造』岩田書院)

②新宮の港町の実態は、今回の調査地だけでなく、市内全域を対象とした遺跡と文献による歴史的景観復原の検討が必要ではないだろうか。

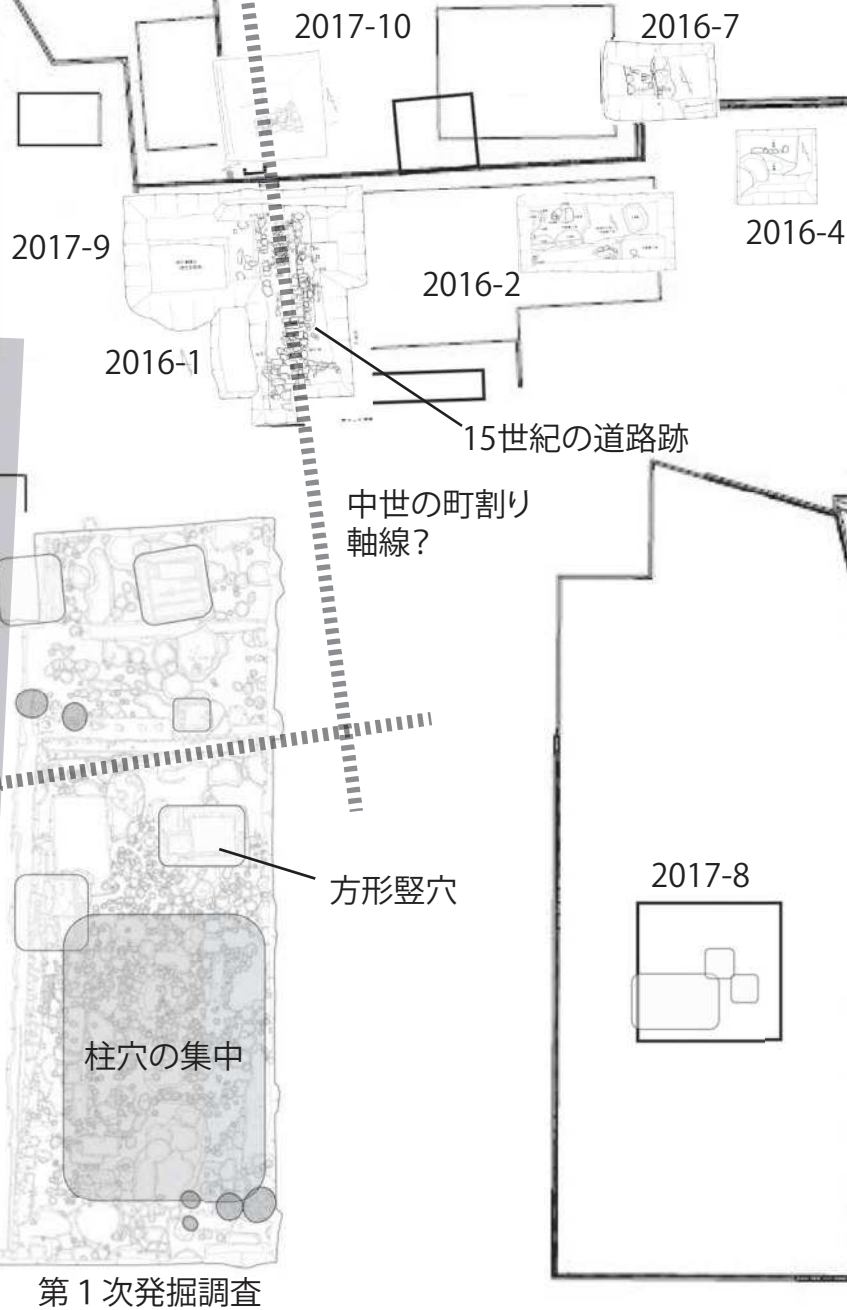
③熊野と備前焼が関係していたのであれば、備前焼の流通から、新宮が太平洋ネットワークの中核拠点であったことが立証されるのではないだろうか。

(高橋修編 2009『熊野水軍のさと』清文堂)

図1 発見された主な遺構

新宮城下町遺跡2016~2017
調査区の配置と
想定される町割りの軸線

江戸時代の町割り軸線



13・14世紀の大型土坑

中世の町割り
軸線?

15世紀の道路跡

中世の町割り
軸線?

方形竪穴

柱穴の集中

第1次発掘調査

2017-4

2017-3

2017-2

2017-1

2017-8

2016-1

2016-2

2016-4

2016-7

2017-10

2017-9



熊野速玉大社

本広寺 (1571年～
新宮周防守屋敷跡)

全龍寺 (1573年
代～堀内氏館跡)

宗応寺 叡尊

妙心寺 1108
瀬戸灰釉瓶子

神倉山への道標

図2 中世の新宮

丸数字は上野元 1984 『丹鶴山出土の中世の古陶磁器』
熊野速玉大社による陶磁器の出土地点

- ①瀬戸灰釉瓶子 13・14世紀
白磁劃花文水注、青磁蓮弁文碗 13世紀
- ②瀬戸灰釉櫛目文瓶子、白磁四耳壺 13世紀
瀬戸灰釉瓶子、瀬戸灰釉三耳壺、瀬戸灰釉四耳壺骨蔵貴
- ③常滑壺 13世紀
- ④瀬戸灰釉壺 14世紀
- ⑤備前細口徳利 16世紀
- ⑥瀬戸灰釉手付水注、瀬戸灰釉印花文水滴 13世紀
瀬戸鉄釉印判文瓶子、瀬戸灰釉瓶子、常滑大瓶 14世紀
- ⑦瀬戸灰釉印花文瓶子 14世紀
- ⑧刷毛目文徳利 (李朝時代)
- ⑨瀬戸灰釉瓶子



那智山巡礼道標



蓬萊1丁目の庚申塚

新宮十郎屋敷跡

公開シンポジウム

『中世熊野の港湾遺跡
新宮津を考える』

発行日：平成 30（2018）年 1 月 7 日（日）

発 行：公益財団法人和歌山県文化財センター
〒 640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の 1

（TEL） 073 - 472 - 3710

（FAX） 073 - 474 - 2270

（URL） <http://www.wabunse.or.jp>

印 刷：株式会社 協 和
